紹介

浅見和彦・伊東玉美訳注『新版　発心集　現代語訳付き』上下

本田逸朗

「ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」この有名な一文で始まる随筆、『方丈記』。その作者である鴨長明もまた、中世日本文学を代表する一人として広く知られているだろう。しかし、『方丈記』以外の鴨長明の著作についてはあまり詳しく知らないという方もまた少なくはないであろう。ここで紹介させて頂くのはその内の一冊、今回角川ソフィア文庫から新版が発行される運びとなった仏教説話集、『発心集』である。

鴨長明その人についての概略は本書下巻、巻末解説に詳しいが、簡単に述べさせて頂くと、彼の人生は平坦なものとは言い難い一生であった。長明は十二世紀中葉、京都下鴨神社の神職の家に生まれた。父親は下鴨神社の最高位の神官であったが、若くして亡くなってしまう。父親という後ろ盾を失ってしまった長明は、その方面での出世の道は閉ざされてしまう事になった。一方、和歌管絃の道においては並々ならぬ熱の入れようで、これも長明の作品である歌学書『無名抄』によれば、自らの和歌が勅撰集である『千載和歌集』に入集した時の喜びは一方ならぬものであった事を自ら記している。若い頃の僅か一首の入集を、年経て後の自著に記すという事は、勅撰集への入集は長明にとっては鮮烈な印象を残した出来事であった事は疑いを入れない。また、『文机談』という書物には、長明が未だ正式には伝授されていない琴の秘曲を人前で披露してしまいひどく責められたという、その情熱を抑えることのできなかった話も書き留められている。『方丈記』の題の由来となった方丈の庵を構えてからも、その庵の内には和歌管絃の抄物と琴・琵琶を置いていたと『方丈記』に記している。これらは、長明にとって和歌管絃の世界から生涯に渡って離れがたかった様子がうかがえる。そういった長明自身の思いは『発心集』の編纂態度の中にも如実に表れている。

巻六の中には和歌管絃に心を寄せた人々の説話が連続して収められているのを見て取る事ができる。例えば、巻六の第七話「永秀法師、数奇の事」を見てみよう。本話は次の様な話である。石清水八幡宮の別当である頼清の遠い親戚に永秀法師という者がいた。永秀は貧しいが風雅を好み、毎日一日中笛を吹いてばかりいた。頼清はこれを聞いて、何でも自分を頼りにしてくれて良いと言い送ったところ、永秀は以前からの望みが一つあると返し送って来た。頼清が何かと思っていると、永秀が頼清の元へやって来て言うには、中国渡来の竹でできた笛が一つ欲しいというだけであった。他の物は全く求めず、頼清が笛の他に実用品など送っても、それがある間は人を呼んで一日中演奏して暮らし、無くなればまた一人で笛を吹いて過ごした。後には無双の笛の名手となったという。永秀は全くの数奇者と呼ばれるに相応しい人物であるが、この様な人物に向ける長明の目は優しい。「かやうならん心は、何につけてかは深き罪も侍らん」と述べてこの話を結んでいる。音楽に専心する永秀の姿に自

らを重ねるところがあったであろう。この他にも、時光と茂光という二人の楽士が演奏に熱中して、天皇からの呼び出しを聞き流してしまった話や、宝日上人という聖が朝昼晩と三種の和歌を詠む事で修行とした話なども収められて、それらのどれにも長明は肯定的な言を述べている。隠逸の士から俗人まで、世を見渡す長明の視点は広い。遥か中世から様々な人が世の中にはいて、色々な事を考えていたのだという事を改めて我々に教えてくれる。多様性という事が言われる現在、改めて読まれてしかるべき書であろう。

扨、本書は以上の如き『発心集』の新版で、平成二十六年現在、最新の物となっている。慶安四年刊本の八巻百二話を収めるものを底本としているが、異本となる神宮文庫本に載る慶安四年本には見られない四つの話も本書の末に収められており、『発心集』と呼ばれる書物に収録されている全ての章段を見る事ができる。脚注も丁寧に付されており、人物についてや、しばしば複雑な義を持つ用語等についても容易に理解する事が可能である。補注として更に詳細な説明も載せられ、各説話を深く理解する事を助けてくれる。同時に、適宜小見出しが付けられて、話の展開が見て取りやすい。又、全文の現代語訳が載せられているのも有難い。原文においてはやはり中々理解しがたい文章はあるもので、現代語訳を通読し、原文と対照してみる事も、古文を学び、内容を理解する為の大きな手助けとなる。

文庫版で求めやすく、一つ一つの章段もけして長いものではないので、初めて古典に興味を持った人から、鴨長明を考える人まで、多くの方々に読まれて欲しい本である。

（平成二十六年三月二十五日発行　上巻四一三頁・一二〇〇円＋税　下巻三六六頁・一一二〇円＋税　株式会社KADOKAWA）

（ほんだ・いつろう　大学院博士後期課程在学）